

## 大分県磨崖石仏研究

# 大野郡千歳村大迫大日如来像について

岩 男 順

### 一 序言

大迫磨崖石仏大日如来坐像は、大野郡の東端に所在する。大野郡内には、当大迫石仏の他、犬飼・菅尾・清川・緒方・普光寺等に磨崖石仏が存在し、それらの殆どに、日羅作の伝説が遺っている。このことは、大分市周辺の磨崖石仏の作者に日羅を伝承するものと関連して、県北地区の仁聞、臼杵地区の蓮城を作者と伝承する石仏と比較し、その各に様式的な相違が存在するのではなからうかと思われる。

かつて先学矢崎美盛氏が、芸術地理学の必要性を力説しておられる<sup>(1)</sup>。筆者はその学を専攻するものではなく、又その学説を十分察知し得たものでもないが、その御所見を参考にし、地方様式の成立を探る目的をもって、この研究を試みたものである。

### 二 所在及び像名

所在地 大分県大野郡千歳村字大迫

大分市より国道一〇号線を南下し、久原から大野川を渡り、犬飼町から田中經由竹田に通ずる県道を一軒程西に行くと、大迫部落に達する。その道路に迫った丘陵に作られた石の階段を五米程上ると、凝灰岩の断崖を、高さ約五米、幅六米程に刳貫

いた岩窟があり、その岩窟一杯に、入母屋造りの堂舎がはめ込まれ、その中央に、凝灰岩の地肌をそのままに、殆ど丸彫りかと思われる程に彫出された一体の磨崖石仏坐像が存在する。

破損の部分もあるが、天冠を頂き、定印であるから、胎藏界大日如来坐像と認められる。

### 三 歴史的背景の考察

石仏所在地千歳村は、和名抄によると豊後風土記に言う大野郡（ちのちの）にしるされた郷肆所（さとよところ）の中の、田口郷に入るものと思われるが、弘安図田帳では、大野郡八七〇町の中にしるされていない。

これについては、豊後国志によると「今田口在井田郷内 是古名癩 存村已」とあるので、恐らく鎌倉時代には田口郷の名は既に無くなって、井田郷に包含されたか、又は改名されたものではなからうかと、いわれているが、<sup>(3)</sup>現在の千歳村に田口の名があるのです、これを井田郷とする説が多いようである。この田口郷も恐らく大野荘と共に、早くから大神氏の勢力下にあったものと思われるが、文治元年末（一一八五）、頼朝は院に奏請して豊後国を知行国としており、<sup>(4)</sup>更に大友文書録等によれば、大友能直が建久七年に入国し、大野莊地頭職を所領し、のち諸子に分封したことになる。<sup>(5)</sup>

この中、井田郷については、貞治六年（一一三六七）正月二十日に吉弘一曇が由原八幡宮に寄進しており、<sup>(6)</sup>明応七年頃（一四九八）には、大友親治所領となっている。<sup>(7)</sup>

大迫の地名は文亀貳年（一五〇二）の沓掛文書に記されているのが、初出かと思われるが、<sup>(8)</sup>大友氏入国当時、恐らく大野氏の没官領として取扱われたものではなからうかと思われる。

中野幡能氏の説によると、宇佐八幡は宇佐氏の氏神であった比売神信仰と、歸化人及びこれと結んだ大神氏のもっていた八幡信仰とが合体したものであるが、奈良時代には比売神の宇佐氏と八幡神の大神氏とが、宇佐八幡宮司職を巡って争い、やがて宇佐氏が優勢となると、比売神が八幡神より優れていることを示すため、八幡神の八幡大菩薩の称号に対して、比売神には

神母（人母）と同音の仁聞菩薩の伝説を創作し、大神氏は豊後に去つて、豊後の大豪族として再出発し、それらの中、大野大神氏は宇佐氏一族が欽明天皇三十二年に御許山を開き、更に六郷山を開いたという仁聞菩薩の信仰に發展せしめたのに対して大野郡神角山に神角寺を開き、欽明天皇三十一年に建立したというように、宇佐八幡宮縁起をそのまま踏襲し、人聞菩薩に対して日羅信仰を起したものであつて、その年代は十一世紀庄園制發展期であろうというものである。<sup>(9)</sup>

この説によると、日羅の名の伝わる所は、大神氏と関係が深いものであるということが出来るのであつて、これは別表一によつても大野郡全域に残る石仏中、仁聞作と伝えられるものが皆無であるという事実からも考えられることであつて、それら日羅作と伝える石仏の所在地は、大野氏の勢力範囲と、ほぼ一致することからも、いえるものと思われる。

ちなみに、大分市付近の石仏所在地が、所謂豊後風土記にいう碩田（おおきた）の地、即ち国府所在地（現大分市古国府<sup>ふるこく</sup>）の植田荘の主要部分の周辺を取り囲むが如く、その四方の要所要所に造顕されているものと共通し、あたかも大野荘の重要な地域を守護するが如く、その東の入口に当大迫石仏、やや離れて犬飼石仏、南東に菅尾石仏、南に六種石仏、南西に緒方石仏、北西には普光寺石仏等が所在し、現在においても、それらは主要道路に面するか、又はその付近に位置し、あるいは又、主要河川又は水路に望む地点に位置していることから見ても、臼杵地区の一個所に集中するもの、宇佐・西国東地区の山間幽邃の地に孤立しているものと、多少異つたものがあり、前述の芸術地理学的な地方様式の一特色を示すものの一つかと考察されるものがある（付図Ⅰ・Ⅱ参照）。

別表Ⅰ 日羅作を伝承する磨崖石仏一覽表

番号	所在地	名称	像種	推定年代	備考
10	大野郡清川村六種				
9	大野郡大飼町田原				
8	大野郡千歳村大迫		大日		縁起
7	〃	C 千仏龕	千躰仏	平安?	
6	〃	B 東群	三尊仏・毘沙門天・十一面等六	藤原中	
5	大分市元町竜ヶ鼻 岩屋寺石仏群	A 西群	大日・三尊仏・不動 ・毘沙門天等十一	鎌倉初 平安末?	
4	〃	D 仏龕	仏坐像五躰・五輪塔	鎌倉?	
3	〃	C 三尊像	仏坐像・脇侍二菩薩	平安?	
2	〃	B 三尊像	像種不明	平安?	
1	大分市元町	A 岩薬師	薬師・不動二童子・ 毘沙門天	平安中	

番号	所在地	名称	像種	推定年代	備考
11	大野郡清川村大化		不動		
12	大野郡緒方町宮園東		大日・不動・持国天 ・二王・五輪塔	藤原末 鎌倉初	豊後国志第九
13	大野郡緒方町宮園西		薬師・釈迦・阿弥陀	平安中 末	豊後国志第九
14	大野郡朝地町普光寺		不動・二童子		豊後国志第九
15	大野郡朝地町軸丸		不動		豊後国志第九
16	大野郡朝地町八原		尊名不詳		豊後国志第九 料50号文書 石仏屋敷
17	大野郡内岩屋寺				豊後国志第九
18	大野郡内法乗寺				豊後国志第九
19	大野郡内光嚴寺				豊後国志第九
20	大野郡内大禪寺				豊後国志第九

番号	所在地	名称	像種	推定年代	備考
21	大野郡内柏寺				豊後国志第九
22	直入郡竹田市会		不動・千手・毘沙門		豊後国志第六

当大迫石仏造営に關しては、寛政年間に書かれた「豊後国大野郡田原庄大迫村大日尊靈像縁起」なるものが村に伝わっていたが、近年火災にあつて失われており、小野玄妙博士著「大分・佐賀両県下の石仏」によると、それは下記の如きものである。

『豊後国大野郡田原庄大迫村大日尊靈像縁起』

惟ミルニ夫、大日如来ハ、常住三世ニシテ、生滅變易ナク、十方一切、仏土ニ充塞リ、一切ノ有情非情ヲ成就シ、五色光明ノ中ヨリ、无量ノ身雲ヲ現シ、无边ノ衆生ヲ濟度シ玉フコト、喩ヘハ天月ノ影ヲ下水ニ分チ、チリチリ草ノ露マテモ宿レルカ如シ。因テ世間ノ日ノ少分相似ルヲ以テ、大日尊ト号シ奉ル。サレハ世ニ貴フ所ノ薬師弥陀釈迦觀音地藏文殊普賢等ノ諸仏菩薩及日月諸天竜鬼神王、及日本国中大小神祇モ皆此如来ノ大悲願力ヨリ顯ハレ玉フニ非ルコトナシ。然ルニ此尊像世ニ日羅ノ作ト云伝フ。日本紀ニ日羅ハ百済国ノ賢人也、敏達天皇ノ召ニ応シテ来レリ。然ルニ其国是ヲ惜ンテ、其臣ヲシテ、日羅ノ作ト云伝フ。日羅身光、日夜火燄ノ如クナル故ニ、殺スコト能ハス。十二月晦日光ヲ失フヲ窺ツテ是ヲ殺スト。豊薩記云、日羅豊後大野郡ニ仏像ヲ作ルコト十七軀、斯人天眼ヲ得と雖、宿業ヲ免カレス。後難波ニ到テ劍難ニ値フトイヘリ。今詳ンスルニ、此尊像ハ日羅ノ所造ナリト雖。恐クハ此国ノ衆生ノ感応ノ因縁ニ依テ現シ玉フコト、猶筑波山ノ男体山女体山ノ直ニ伊弉諾伊弉冊ノニ神ナルカ如クナラン。何以シカイフトナラハ。故老相伝フ、此尊像ノ白毫及両眼悉皆黄金ナリシニ、百年前長峯村ノ百姓是ヲ抉リ出シテ盜ミシカ、忽ニ惡病発シテ、即時ニ死シ、其子孫皆頼ニ嬰リ、家今タヘタヘナリト。其後大迫村ノ百姓、御頸ノ危キヲ恐レ、別ニ御首ヲキサミ明日ハキリカユヘシト定メシニ、其夜尊像大ニ震吼シ玉ヒシユヘ、ヤメシカ、其人忽大熱病ヲ発シ、即日死セリト云リ。其威神ノ畏ルヘキコト此ノ如シ。又昔ヨリ此如来ニ些少ノ田地御寄付アリ

又三十年前御代參ノ時、隘路ニ馬駕籠ノ通行ナルヤウ道造リシ人今猶數人存在セリ。御連枝方モ毎度御參詣アリトイヘリ。感応ノ靈驗ナクンハ何ソカク崇敬シ玉ハンヤ。且毎年正月七日四方ヨリ群集テ礼拝供養シ奉ルカ如キ、皆是如來大悲願力ノ所為ナルコト、何ソ疑ハンヤ。然ルニ先年ハ只五尺許リノ礼堂ノミアリシカ、庄屋足立富之丞組頭八郎左衛門願ヒ奉リ、材木ヲ集メ、今ノ礼堂ヲ素立セシニ、明和八年ヨリ、庄屋足立長兵衛礼堂ヲ造畢シ仏殿ヲ構ヘ石階ヲ築キ小庵ヲ結ヒ、崇敬増ニナル者、如來ノ威神力日ヲ逐フテ、新タナルヲ知ル。寛政八年丙辰十月、余偶々縁ニ催サレ來テ拝謁セシ日、足立氏ノ需ニ依テ記スルモノナリ。

#### 佐伯大日寺再住苾芻 閑居淨円記

この縁起によると、ことさらに当像の威力を強調している節が見受けられるが、このことは、前記大野大神氏の勢力の誇示、又は大野荘入口の守護神的魔力を示したものと考えられぬことも無く、尚且つ当像の造願も、大野大神氏一族によるものと、見ることが出来るのではなからうか。

#### 四 造形的記述

形状 頂髻は風化欠損部多く、現状では瘤状。天冠台上に花冠をつけ、天冠台下の地髪は、髮際を一直線に彫出した平髪が前額にあり、右後頭部付近に黒色彩色を見る。恐らく毛髪を現わしたものであらう。

白毫相を現わし、通肩であるが、胸前を大きく開き、定印を結び、結跏趺坐するが、裳に衣皺多く、あたかも袴を着し正坐する感がある。台座は造られていない。

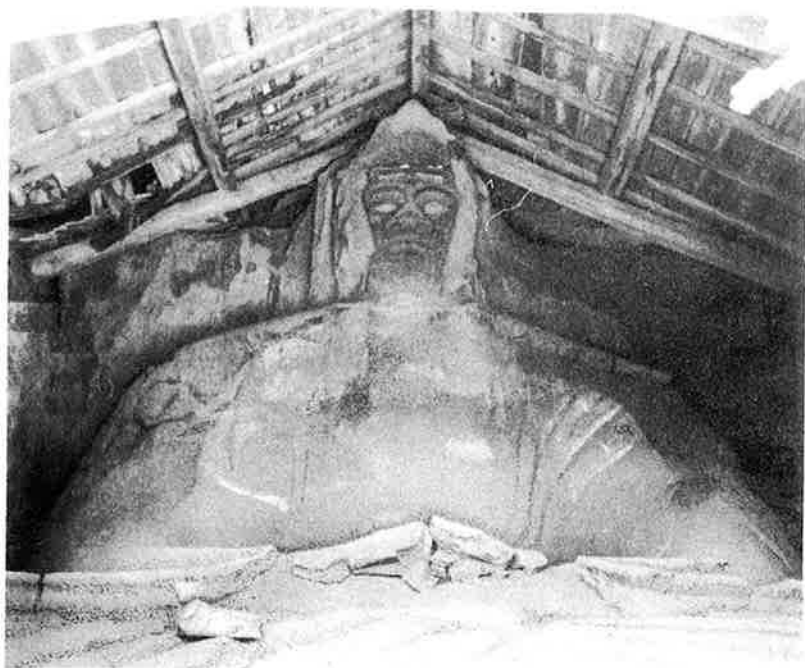
法量

像高

三三〇五耗

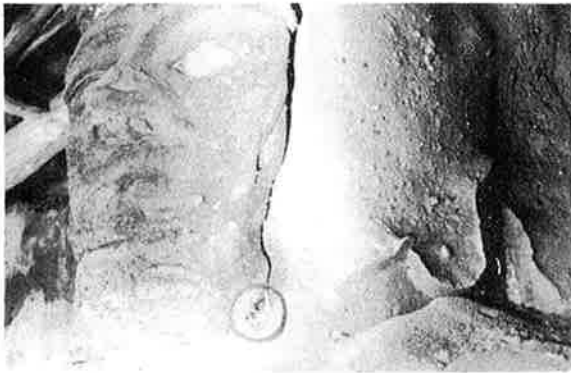


(1) 大迫石窟全景



(2) 大迫石仏大日如来像





- (3) ○内植物纖維露出箇所
- (4) 大迫石仏大日如来像膝前衣紋
- (5) 天文十九年(一五五〇)記銘  
円成寺石仏阿彌陀如来像

頂ノ頤端 一一五五耗

面長 七〇五〃

面幅 六三五〃

耳張 七六〇〃

面奥 左九八〇〃  
右六六〇〃

肘張 三〇九四〃

膝張 四四一〇〃

膝高 左八〇〇〃  
右七九五〃

膝奥 四一〇五〃

造材 凝灰岩及び粘土を主とし、漆喰仕上の個所もある。

窟龕の天井は硬質凝灰岩であるが、本体の上半身の大部分は、硬質凝灰岩下層の凝灰岩質の砂利層を地石とするようである。後頭部・背中・殿部は後壁と接続しているが、殆ど丸彫りに等しく見える。

頭首部は後壁接続部から、顔面の方に三分の二位までと、両肩・胸及び腹部までが地石であるが、花冠と顔面は厚さ三〜四糎位、両肩を包む衲衣は厚さ八糎位の粘土仕上、両膝を包む裳襪は厚さ一九糎にも及び漆喰、両前腕及び定印の両手首からは粘土で造られている。

これらの粘土の部分は、地石上に植物性繊維を置き、その上を粘土で仕上げたものである。

本像の技法について小野玄妙博士は、「他の大分県内の石仏中に全く類例がないばかりでなく、日本唯一の石芯塑仏である」とのべておられるが、他に大分県内では、大野郡三重町菅尾石仏阿弥陀如来坐像が、部分的に粘土仕上をしており、大分市元町

石仏棄師如来坐像は拙稿でのべておいたが、地石の割れ目を粘土で埋め、顔面・肩・胸部等の一部に鉄釘を地石に打ち込み、その上を植物纖維混人漆喰で仕上げ、更にその上に彩色を施したものである。

栃木県大谷石仏においても、粗面の岩面の透間に粘土を充填し、その上で全体に同じ粘土を厚さ一糎程に仕上げたものがあるが、本像の如き技法は他に無いようである。但し現在余り行われていないようであるが、左官が壁の上塗りをする際に、地塗りの壁に釘で植物性纖維をA形に止めて置き、その上から上塗りをするもので、「ひえこ」と言うものがあるが、本像の技法と似たものがあるように思われる。

#### 頭部

頭頂は欠損し不明瞭、天冠台下の地髪は、髮際を一直線に彫出した平髪、後頭部は窟後壁より、本体芯部と共に彫出された地石であるが、顔面は厚い部分では一五糎ほどの粘土で造られたものであって、上から花冠、天冠台、前額、両目、鼻、上下唇に及んでおり、現状では両側頭より両頬の大部分と、下顎の部分が剝落し、地石が現われている。

#### 頸部

頸部前面は剝落しているが、左右側面は原形が残っている。それによると、道溝は造られていない。

#### 胸部

胸部中央付近から腹部までは地石であるが、両肩から上腕に至る部分は、厚さ八糎ほどの粘土で仕上げられている。

#### 膝部

地石の上に厚さ一九糎に及ぶ両袖口と、厚さ五糎ほどの裳の襷が、漆喰で造られている。特に多くの便化された平行曲線状の襷が厚く盛り上って両膝をおおっているが、これは康永二年（一三四三）刻銘の京都府相楽郡加茂町東小、通称カラスのツボ阿弥陀如来磨崖仏、天文十九年（一五五〇）刻銘の奈良市忍辱山町円成寺石仏阿弥陀如来像等に共通した特色である。

(写真参照)

#### 印相

前腕、両手首共に粘土で造られており、定印である。

母指は第一関節と爪を造つてあるが、残る四指は一まとめにし、関節等の細部は省略してある。

坐相

結跏趺坐であるが、裳の襷が厚いので、あたかも袴を着し正坐した姿と見間違ふ恐れがある。

光背・台座

共に彫出された形跡は認められない。

彩色

頭髮の黒色は地石に直塗りであり、天冠台は赤色彩色をした形跡が認められる。

眼球は胡粉を下地とし、その上に赤色を塗り、黒色で縁取りをした形跡が認められるので、表情は相当強い印象を与えていたものと思われる。

衲衣、裳の襷等に胡粉下地が残っているが、その上に如何なる彩色をしていたものか、判明しない。

## 五 計測

本県内磨崖石仏及びその他の仏像の多くは、前述の如く宇佐・国東半島地区仁聞、三重・白杵地区蓮城、大分市・大野地区日羅を伝説的作者とするものであるが、それらは各所在地域独特の作風を持つものではなからうかと思われるものがあり、これらの特徴を人類学的生体計測法を適用し、その形体・面相を分析・観察することによって、いわば芸術地理学的にその地方独特の様式とも言うべきものが成立し、仁聞様・日羅様・蓮城様とも假称されるべき、類型の特徴が存在し、その地方の作風を見極める手だてともなり得るものが、あるのではなからうかと思われ、ひいては本県内磨崖石仏について、確実な史料が殆ど無いので、その成立の背景を探り得ない現状へ、何等かの手掛りともなることが出来るのではなからうかと期したものであ

る。

計測方法については拙稿に記してあるが、計測範囲については、先に頭身示数の計測を試み、次に相貌的顔面示数の計測、及び磨崖彫出（凸出）の度合を知るために、面奥（鼻尖より後頭部に至る水平直線距離）を〇〇とし、それに対する面長（前額被髪際正中下縁より頤端までの正中鉛直距離）と面幅の割合を計測してみた。

又、平安前期の木彫仏像中の幾らかを撰び、その相貌的顔面示数と、面奥幅及び面奥高両示数を比較してみたが、それらは別表2に示した。

### 一 頭身示数

推定立像換算全身長の算出

頭頂 宝髻が風化欠損しているが、現在の最頂点がほぼ推定頭頂に近いものと思われるので、現況最頂点を以て頭頂とした。

頭部全高 = 頭頂 ~ 頤端 = 1155 mm

推定立像換算全身長 = (頭頂 ~ 推定恥骨結合部間正中鉛直距離) × 2 = 2700 mm × 2 = 5400 mm

頭身示数 =  $\frac{5400}{1155} = 4.68 \pm$

即ち、四・七頭身弱となり、大分市元町石仏薬師如来坐像（通称岩薬師）の示数四・九に、ほぼ近いものと思われる。

### 二 相貌的顔面示数

面幅 = 635 mm

面長 = 705 mm

$$\text{相貌的顔面示数} = \frac{\text{面長}}{\text{面幅}} \times 100 = \frac{705}{635} \times 100 = 111.0$$

即ち、相貌的顔面示数一一一となり、この示数はやや面長な相貌であることを示し、大分市植田地区口戸石仏中、中央窟龕の女神形半跏思惟像の示数一一八、豊後高田市熊野石仏大日如来像の同じく示数一一八に、かなり近いものと思われる。木彫仏像では、貞観四年記録岩手県黒石寺薬師如来坐像の示数一〇六にやや近い。

二 面奥幅示数

$$\text{面幅} = 635 \text{ mm}$$

$$\text{面奥} = 980 \text{ mm}$$

$$\text{面奥幅示数} = \frac{\text{面幅}}{\text{面奥}} \times 100 = \frac{635}{980} \times 100 = 64.9 \text{ 十}$$

即ち、示数六四・九となり、この数値は面幅よりも面奥がかなり深いことを示しており、筆者の計測によると、臼杵市深田の古園石仏大日如来像頭部の示数六七・三にやや近いものと思われる。

県内の主要磨崖石仏の殆どが、示数七〇以上であるにもかかわらず、本像が示数七〇以下であるということは、古園石仏大日如来像頭部と共に、通常の磨崖彫刻技法を無視したものであり、地石の状態から自然に面奥を深くしたものが、丸彫りに近づくために殊更に木彫と同様の技法を用いたものか、凸出の効果を強めるために自然に面奥が深まったものかの何れかと思われる。

#### 四 面奥高示数

面長 = 705 mm

面奥 = 980 mm

$$\text{面奥高示数} = \frac{\text{面長}}{\text{面奥}} \times 100 = \frac{705}{980} \times 100 = 71.8+$$

即ち、示数七一・八であつて、この数値は大分市滝尾地区曲石仏伝釈迦如来坐像の示数七一・四にほぼ等しく、前記面奥幅示数でのべた如く、面奥の彫出が深いことを現わしている。

#### 六 作風上の特色

頭身示数四・七は、拙稿で度々のべた如く、平安前期的仏教彫像の持つ特色の一つと思われ、相貌的顔面示数については、北村、石崎両氏の研究によると、示数一二〇以上を示すものは、飛鳥仏に多く、白鳳・天平・平安前期には皆無であり、白鳳・天平・平安前期では示数一〇〇前後のものが多く、概して白鳳期は丸顔で、天平期以後では次第に方形に近いと言ふことであるが、本像は示数一一であつて、熊野石仏大日如来像の一八よりは少なく、曲石仏の一〇八よりは多いが、この程度の示数ならば、貞観四年記銘岩手県黒石寺薬師如来坐像の一〇六、寛平四年記銘和歌山県慈尊院弥勒仏坐像の一五等に近いものであつて、方形に近いが、やや縦長の相貌であり、平安前期的相貌に近いものと言えよう。

面奥と面幅の割合では、示数六四・九であり、これは臼杵市古園石仏大日如来像頭部の示数六七・三にやや近いが、本県内磨崖石仏中では最も低い示数を示すものの一つかと思われる。

面奥と面長との割合では、示数七一・八となり、大分市高瀬石仏中尊大日如来坐像の示数六七・〇には及ばないが、大分市

曲石仏伝釈迦如来坐像の示数七一・四にほぼ等しい。

これらはいずれも頭部の彫出が、通常の比例よりもはるかに深いことを示しており、凝灰岩質の地石の場合は、その性質から彫出を浅くすることが安全であるにもかかわらず、本像及び本県内の磨崖石仏の彫出は非常に深いものが多い。このことは、谷口鉄雄氏が指摘され、拙稿でも触れた如く、本県内石仏には木仏師系仏師によるものが多い、と言う説を裏付けるものではないかろうかと思われる。

造法については（四 造形的記述中）造材の項で精しく述べておいた如く、彫像全量に対して地石の不足する部分は、粘土によって仕上げたものであって、その際、地石に麻の如き植物性繊維を置き、更に漆喰で仕上げるという独特の技法である。

この技法は現在も左官の用いているものであるから、本像の製作も、あるいは地方の石工兼左官的な仕事にたずさわる者によってなされたものかとも思われ、このことは、殊更に単調に反復した衣皺の丁寧な仕上げ方から見ても、うなずけるものがある様に思われる。

## 七 製作年代の推察

本像の諸計測値は、平安前期的作品に共通する示数を示しているものと思われるが、大分市周辺及び大野郡内の主要な磨崖石仏と、本像とを比較すると、本像には全体的に調和を欠ぐものがあり、その生々しい印象から見ても、本像の製作年代は、平安鎌倉の間とは言えないものと思われる。

渡辺澄夫博士及び飯田久雄氏の研究によると、鎌倉時代（建久四年又は七年）大友氏（中原親能）によって大野氏は滅ぼされ、以後大野郡全域にわたって大友能直の所領となったものであるが、大野大神氏滅亡以前にあっては、大野地方寺院の大部分は、天台系寺院であったと思われるが、大友氏支配下において、これら天台系寺院は、漸次禅宗寺院に転宗して行ったものと思われる。<sup>(20)</sup>



このことは、大野庄の領家が臨濟禪の三聖寺であることから、推察し得るものであつて、飯田氏はその時期を、建長以後かと、考察しておられる。

従つて、かかる大磨崖石仏の造頭が、大友氏一族所領時期に行なわれたとは、思われぬものがある。

富来隆氏の研究によると、大野泰基の霊魂を祭る御霊社は、大野・阿南地方に多いと言ふことであるから、大野大伸氏の遺族等が、滅びた祖先の「御霊社」的な考えのもとに、守護神・幸福神としての働きを示すと共に、逆に「たたり神」としての働きを示すものとして、本像の造頭を行なつたものではなからうか。

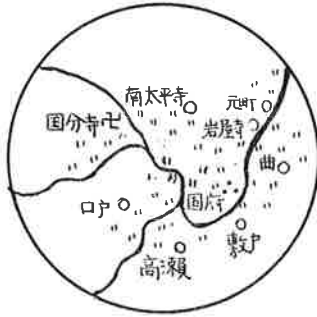
そのことは、前記(三 歴史的背景の考察)に記した如く、本像の縁起の内容からもうなずけるものが、含まれているように思われる。

その造頭の時期については、判断に苦しむものがあるが、像の頭頂から下腹部(両膝部上縁と腹部との接合点)までの正中鉛直距離は二米七〇厘であり、これは偶然にも大分市元町石仏薬師如来坐像と一致する。その他、面長・面幅・面奥についても、多少の差はあるが、ほぼ近似する法量を持っているので、あるいは元町石仏薬師如来像を模して造つたものでは、なからうかとも思われ、その時期は、恐らく大友氏滅亡後であり、製作者は大野一族ではなからうかと推察するものである。特に相貌上の特色として、本像の鼻部は大きく、鼻幅(両鼻翼最外側間水平距離)は広く水平に拡がり、現状では顔面の大部分を占めている様に見られる。かくの如く両鼻翼が大きく水平に拡がる作例としては、前記康永二年刻銘京都府相楽郡加茂町東小カラスのツボ阿弥陀如来磨崖石仏、天文十九年刻銘円成寺石仏阿弥陀如来坐像、慶長十五年(一六一〇)刻銘白毫寺石仏弥勒如来立像等があり、これらの像に共通した衣皺の平行曲線状の作風と共に、室町時代以降に現われる特色かと思われる。

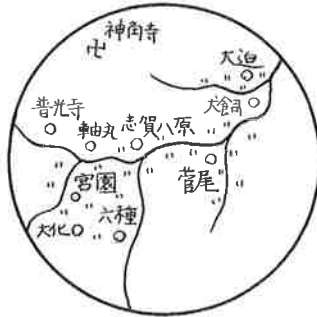
製作年代は、前記の如く、恐らく大友氏時代に磨崖石仏造頭が行なわれたとは思われぬので、大友氏滅亡前後、即ち室町末期か、江戸初期に降るものと推察するものであるが、決定的なことは言えない。

本像の如く、日羅伝説を持つ磨崖石仏は、大分市付近にあっては付図Ⅰに示す如く、大分川及びその支流七瀬川を挟み、豊後国府を中心として、植田地区沃野（植田庄の一部）の周辺を囲むが如く所在する。

大野地区にあっては、付図Ⅱに示す如く、大野庄内の交通及び河川（水路）の要所付近に所在し、それらはおおむね大野庄を囲むが如き配置をなしている。



付図Ⅰ 大分市付近



付図Ⅱ 大野郡内

(○) 印磨崖石仏所在地  
 田

これに対して宇佐・国東半島地区の仁聞を作者と伝承する地区にあっては、檜本石仏・熊野石仏・真玉石仏の如く、山間幽邃の地に散在する。南部臼杵地区、即ち蓮城を作者と伝承する地域にあっては、深田石仏の如く一箇所に集中しているという特色がある。

次に日羅を伝承する地区では本尊の向って右手に、別の窟龕を造り、磨崖五輪塔を双塔形式に配置する場合がままある。即ち元町石仏・曲石仏・敷戸石仏・口戸石仏の如きがそれである。大野郡緒方町宮園東石仏にあっては、本尊の向って左に磨崖五輪塔が双塔の形式に彫出されており、本尊と同一窟龕内にある点が、前記大分市周辺石仏と異っている。臼杵市深田石仏にあっては、堂園石仏阿弥陀三尊像の向って左の一壁面全部に五輪塔を連続的に磨崖彫出したものがある。

更に彫出技法としては、宇佐・国東地方はその彫出の度合は、割合に扁平であつて、中肉彫り程度を限度としているが、臼杵地区、大分・大野地区にあつては、大半が丸彫りに近く、県北地区とは、量感の把握の仕方を異にしているものと思われる。但し大分市付近にあつては、敷戸石仏・口戸石仏の如く、他と比較して多少扁平なものも存在する。

これらの諸点は、假に仁聞・日羅・蓮城様式とも言う可きものの諸特質を立証するものであると思われるが、尚今後豊後地方磨崖石仏の総括的な比較研究に待たねばならぬものと思われる。

本像の計測値は、概して平安前期の数値を現わしているが、その作品の持つふん囲気はむしろ近世的な生々しさがある。これらの印象によつて本像を判断することは危険であるが、決定的資料が皆無であるということは、この石仏の研究に多大の困難を伴うものである。

本像の価値は、その破損の状況から見ても、又作品の持つ造形的格調の点からも、他の県内磨崖石仏諸像と比較して、巨大な割に、より低く見られることは、止むを得ないものがあるが、その技法上の問題では、日本にも数少ないものであらうと思われる石芯塑造的なものであつて、珍しい作例であり、本県内磨崖石仏製作技術領域の範囲を示す資料として、興味ある作品であり、又、石仏造願に力を注いだ大野大神氏の本拠に近い地点にあつて、その子孫等が祖先の違した業を継いだ一作品と見た時、新たな感懐のもとに、見直される可きものかと思われる。

註

(一) 矢崎美盛氏「様式の美学」一九七頁

(二) 豊後国志

(三) 佐藤四信氏「豊後風土記研究」二一九頁

(四) 渡辺澄夫氏「郷土史大系一」所収（「大分県史」）一九九頁

(五) 九州荘園綜合研究会編「豊後国大野荘の研究」所収 渡辺澄夫氏「豊後国大野荘における在地領制の展開」  
同渡辺氏前掲書(三)二〇四頁

(六) 大分県史料(九) 第二部 大分諸家文書一五〇頁 大分柞原八幡宮文書 八八 吉弘氏輔寄進状案

(七) 熊本県史料 志賀文書 二六五 大友親治預ヶ状

(八) 大分県史料(一三) 第二部五四頁 杳掛文書 八 井田郷長峯名五郎丸隠田注文

(九) 中野幡能氏「八幡信仰史の研究」一九四 二五九〜二六一 三三五頁

(一〇) 小野玄妙氏「大乘仏教芸術史の研究」所収 「大分佐賀両県下の石仏」四〇五〜四〇六頁

(一一) 同上書四〇三〜四〇四頁

(一二) 拙稿大分大学芸学部研究紀要B集第二卷第二号「大分市元町磨崖仏、薬師如来像について」

(一三) 内務省「栃木県調査報告」四三頁

(一四) 拙稿 前掲書(一一)

(一五) 同 前掲書(一一)

同 大分大学芸学部研究紀要 第二卷第四号 「大分市植田、高瀬石仏について」

同 大分大学教育学部研究紀要 第三卷第一号 「大分市滝尾、曲石仏について」

同 大分大学教育学部研究紀要 第三卷第二号 「大分市植田地区口戸石仏について」

(一六) 北村直躬・石崎達二氏「古代仏藏の人類学的研究」六四頁

(一七) 谷口鉄雄氏「日本の石仏」六四〜六八頁

(一八) 拙稿 前掲書(一一) 四六頁 同(一五)の「大分市滝尾、曲石仏について」五一頁

(一九) 渡辺澄夫氏前掲書(五) 及び同書所収飯田久雄氏「大野荘と三聖寺」

- (一〇) 飯田久雄氏前掲書(一九)三二頁  
 (一一) 同 (一九)二六頁、四四頁註六  
 (一二) 富来隆氏「吾妻鏡」の治承五年にみえる 高田ノ次郎隆経について」一三頁

別表二

	立像換算全身身長	頭部部全高	面長	面幅	面奥	頭身示数	相貌的相面示数	面奥幅示数	面奥高示数
大迫石仏大日如来	5400	1155	705	635	980	4.7	111.0	64.9	71.8
元町石仏薬師如来	4740	960	650	720	965	4.9	90.3	74.6	67.4
高瀬石仏大日如来	1885	290	201	222	272	6.5	91.0	81.5	67.0
曲石仏阿弥陀三尊中尊	1720	285	217	210	207	6.0	103.3	101.4	104.8
曲石仏伝釈迦如来	4570	805	600	595	840	5.7	108.0	70.8	71.4
口戸石仏女神形半跏思惟像	758	121	100	91	54	6.3	109.9	169.0	194.4
南太平寺第一窟阿弥陀如来	960	170	120	115	105	5.6	104.3	109.5	114.2
南太平寺第二窟阿弥陀如来	1090	195	117	122	97	5.6	95.9	126.0	121.0
熊野石仏大日如来	13760	2635	1600	1350		5.2	118.0	104.3	
臼杵石仏大日如来頭首部		600	534	606	900		88.1	67.3	59.3
岩船寺阿弥陀如来		566	566	573	754		98.3	76.0	75.1
黒石寺薬師如来		233	233	218	288		106.	75.7	88.5
慈尊寺院弥勒仏		189	189	165	229		115.	72.1	83.0
醍醐寺薬師堂薬師如来			370	360	480		102.7	75.0	77.1

備考 熊野石仏大日如来像計測数値は酒井留蔵氏「豊後高田市誌」P・214第14表  
 岩船寺・黒石寺・慈尊院諸像法量は中央公論美術出版「日本彫刻史基礎資料集」  
 平安時代造像銘記篇1  
 醍醐寺薬師堂薬師如来像法量は西川杏太郎氏の提供による。  
 その他は岩男計測。